

韓国人と日本人相互の民族的印象形成と、 両者の印象上での在日コリアンの位置づけに関する計量的分析^{1,2}

中原洪二郎・潮村公弘

キーワード：民族 印象形成 在日コリアン 日本人 韓国人

Mutual Ethnic Impression Formation between the Koreans and the Japanese, and the Impression of the Korean Residents in Japan by Both Ethnic Groups

Kojiro NAKAHARA and Kimihiro SHIOMURA

Key Words : ethnic group, impression formation, the Korean residents in Japan,
the Japanese, the Koreans

問 題

印象形成の研究において、いったん形成された印象は、その後に客観的な情報が追加された場合でも、初期に形成された印象を補強する形での変化が生じる傾向があるということは広く認められている（Hamiltonら1980など）。また、初期の印象形成に必要な情報は必ずしも多くなく、量的にわずかで、質的に曖昧であったとしても、印象形成によって他者情報を固定化するメリットが大きければ、その印象は十分な強度を持って形成される（Rubartら1978；Tversky & Kahneman 1974など）。

このことは、民族的集団間の社会的関係について考察する上で、非常に重要な示唆を与えている。仮に明確な利害対立など、他集団に対して否定的な印象を形成する「合理的」理由がなかったとしても、集団間に流通する情報の質と量が限定されている状況では、その情報によってのみ、他集団に対する不合理かつ否定的な初期印象が形成される可能性がある。そして将来的に、具体的な利害対立などが発生した場合、すでに形成されている不合理かつ否

¹ 本研究は2003年10月18日に日本社会心理学会第44回大会で行った研究発表「韓国人と日本人の相互民族イメージ形成と在日コリアン—日韓大学生の調査から—」（中原・潮村・中村 2003a）を再構成したものである。また本研究はミシガン大学社会調査研究所を中心にした調査研究プロジェクト「Inter-group Relations among Ethnic Groups in Japan」の一環として実施されたものであり、中原・潮村・中村・渡邊（2002）とあわせて、本調査へ向けての予備調査研究という側面を持っている。

² 調査票の構成については「Inter-group Relations among Ethnic Groups in Japan」プロジェクトのメンバーである中村 真・渡邊晶子の両氏より有意義なコメントを多く頂戴した。

定的な印象に基づいて、より望ましくない社会的関係を帰結するかもしれない。実際、在日コリアンと華人華僑の相互的印象について、両者の直接的接触がほとんどなく、具体的な利害対立も存在していないにもかかわらず、間接的かつわずかな情報によって、互いに否定的な印象が形成されつつあることが指摘されている。

そこで本研究では、韓国人と日本人の大学生がお互いにどのような集団印象を形成しているか、また両者が在日コリアン³についてどのような印象を形成しているか、の2点を中心に分析を行い、その特徴を検討する。

第1の目的である、韓国人と日本人の自民族および相互の印象形成については、両者がお互いをどのように認識しているのか、自民族の印象と他民族からの印象はいかなる側面において一致し、また一致していないのか、自民族および相互の好悪は、印象によって決定されているのか、という問題が探索的に分析される。

第2の目的である、在日コリアンに対する印象形成については、韓国人と日本人からみて、彼らが「韓国的」であるのか、「日本的」であるのか、あるいは「中間的」であるのか、それともそのいずれかでもないのか、ということ、記述的に明らかにすることがまず必要であろう。韓国人からみて在日コリアンが「韓国的」であるのか「日本的」であるのか、日本人から見て在日コリアンが「韓国的」であるのか、「日本的」であるのか、ということは、在日コリアンの置かれている社会的な立場を浮き彫りにするだろう。

金ら(1997)が行った在日韓国人の成人男性に対する調査によれば、在日韓国人の大多数はすでに2世以上であり、民族名と日本名の使い分けについては、相手が日本人であれば8割が、相手が在日韓国人であっても6割以上が日本名を使用していた。また、半数はほとんど韓国語を話すことができず、やはり半数が民族的な儀式を継承していないという調査結果が得られている。自らのアイデンティティについて、コリアンにも日本人にもなりきれずに悩み葛藤する在日コリアンも少なくない(福岡1993)。在日コリアンの両親が子供の将来に望む姿として、約20%が「日本に帰化し、日本人として生きる」ことを望んでいるのに対して、約40%は「韓国・朝鮮籍と民族意識の保持」を望んでいるという(京都大学教育学部比較教育学研究室1990)。また、日本に帰化してもなお韓国での参政権を保持していきたい、といった気持ちを持っている在日韓国人も少なくない(中原2003b)。このように、在日韓国人のアイデンティティは日本人と韓国人の狭間で揺らいでいるようにも見える。しかし、これらの事柄によって、在日韓国人は日本人と韓国人の「中間的存在」であると言うことは必ずしもできない、ということは強調しておきたい。在日韓国人は文化的に見て日本的でもあるし、韓国的でもあるが、それらは統合的に見てすでに日本人とも韓国人とも異なった文化的歴史的背景であり、独立したエスニック集団と考えることもできるからである。

方 法

まず本研究で分析される調査データについて概説する。韓国人の調査対象者については

³ 本研究では「在日韓国人」と「在日コリアン」という2つの言葉が用いられるが、大韓民国の国籍を持って日本に在住している人々を指示する場合には「在日韓国人」を用い、「在日コリアン」は国籍などによらず、より広義な意味で用いている。

2002年10月24日と29日に、日本人の調査対象者については2002年10月から11月にかけて、自記式調査票による集合調査を実施した。なお韓国での調査実施時には日本人の社会心理学研究者（10月24日）と日本人の日本語教師（10月29日）が、韓国人研究補助者のサポートを受けながら、回答方法などについてインストラクションを行った。韓国人対象者はカトリック大学校（大韓民国，京畿道富川市）の日語日本文化学科で日本語を学習する学生84名（男性14名，女性70名），日本人対象者は信州大学人文学部で専門課程授業を履修している学生（主に英語学・日本語学・日本語教育学・社会心理学を専攻）と，信州大学の1年生を対象として開講されている共通教育科目の受講生，合計123名（男性47名，女性76名）である⁴。なお，「民族的イシューに対する態度」「在日コリアン固有のイシューに対する態度」の分析に際しては，在日コリアンのデータと比較対照するために，1995年に日本に定住している韓国籍を持つ満20歳以上の男性を対象者として実施した調査（金ら1997）データの中から，20歳代の対象者106名を抽出して用いた。

今回の調査では韓国人対象者は日本語を学習している大学生である。日本語で作成された調査票は，信州大学人文学部にカトリック大学校より留学している複数の学生への事前調査を通じて，日語日本文化学科の高年次学生であれば日本語の質問内容が適切に理解できると判断された質問項目群を用いている。それゆえ韓国人対象者用の調査票には，日本人対象者用と同じく，日本語の質問項目を掲載した。ただし一部の質問項目においては，調査対象者が韓国人であるか日本人であるかによって，測定対象としての構成概念は同一ではあるけれども，具体的な評定対象が異なる質問項目が存在した。具体的には，「相手民族」である。また，「相手民族」に関するデモグラフィック変数，および「相手国の言」の言語学習経験に関しては，調査対象者が韓国人であるか日本人であるかによって質問項目自体が一部異なるものとなった。

また，学習途上の日本語学習者を対象としている以上，日本語での質問項目内容が正確に理解されないままに回答されてしまう危惧が残る。それゆえに，日本語での質問項目をハングル訳した項目を参考として併置しておいた。なおハングル版の作成については，日本への留学経験があり，カトリック大学校で日本語について研究している大学院生に翻訳を依頼した。さらに注意事項として，基本的には日本語の質問項目を読み，日本語での回答部分に回答してほしいこと，ただし内容について多少なりとも理解が十分でない可能性がある場合には，ハングル訳した質問項目をあわせて参照して回答するように教示した。

分 析

まず，自民族の印象および相互印象の比較と相違について検討しよう。「在日コリアン」「韓国人」「日本人」のそれぞれについて「閉鎖的な—開放的な」「失礼な—礼儀正しい」「外向的な—内向的な」「つめたい—あたたかい」「消極的な—積極的な」の5項目を，また好悪に関する1項目（嫌い—好き）をSD法によって測定した。それぞれは1点から4点で尺度化され，中間値は2.5点である。韓国人対象者が「韓国人」について，日本人対象者が「日

⁴ 記述統計結果等については，韓国言語文化研修報告として，潮村（2003）に記載されている。

本人」について回答する場合は、自民族に対する印象ということになる。

分析に際しては得点の比較が行われるが、比較はあくまで相対的なものである。具体的に言えば、好悪評定で「最も低い点数」になっていたとしても、得点が2.5点以上であれば「どちらかといえば好き」を意味している、ということになる。

まず韓国人と日本人がどのような相互印象を持っているかについて検討する（表1、表2）。韓国人評定者も日本人評定者も、自民族に対する印象と他者が自民族に持っている印象についてはその差がかなり大きいことが見て取れる（表1、表2）。特に日本人評定者については、今回取り上げたすべての項目において、大きく印象のずれが発生していることがわかる。このずれは、必ずしも自らの印象を肯定的に捉えたものではない。たとえば、日本人評定者は5つの印象項目のうち、「冷たい—あたたかい」を除くすべての項目で、韓国人評定者よりも自身を低く評価している（表2）。

韓国人評定者も日本人評定者も、在日コリアンについては比較的に近似した印象を持っていることがわかる（表3）。

さらに評定対象ごとに印象の平均値を整理しなおし、評定者の国籍を被験者間要因、評定対象を被験者内要因とするGLM分析を行った（表4、表5）。表中のアルファベットは、それぞれの項目の中で有意な被験者内効果が認められたものをあらわしており、事後検定の結果として、同じアルファベットの数値間には有意差がないことを、異なるアルファベットの数値間に有意差が認められたことを意味している。例を挙げると、韓国人評定者が韓国人、

表1 評定者の国籍による印象比較 t 検定（韓国人について）

対韓国人	開放的**	礼儀正しい	内向的	あたたかい**	積極的**	好き**
韓国人評定者	2.30	3.00	2.51	3.39	2.75	3.21
日本人評定者	2.72	2.84	2.36	2.72	3.15	2.77

**p<0.01

表2 評定者の国籍による印象比較 t 検定（日本人について）

対日本人	開放的**	礼儀正しい**	内向的**	あたたかい**	積極的**	好き*
韓国人評定者	2.59	3.49	2.78	2.01	2.18	2.70
日本人評定者	1.94	3.11	3.16	2.65	1.89	2.88

*p<0.05, **p<0.01

表3 評定者の国籍による印象比較 t 検定（在日コリアンについて）

对在日コリアン	開放的	礼儀正しい**	内向的*	あたたかい	積極的	好き*
韓国人評定者	2.39	2.97	2.84	2.61	2.37	2.80
日本人評定者	2.14	2.85	2.69	2.69	2.53	2.64

*p<0.05, **p<0.01

表4 評定対象による印象比較（韓国人評定者）

対韓国人	開放的	礼儀正しい	内向的	あたたかい	積極的	好き
韓国人（自民族）	2.32	3.01a	2.53	3.37a	2.78a	3.23a
在日コリアン	2.39	2.96a	2.84	2.60b	2.36b	2.79b
日本人	2.57	3.46b	2.79	2.00c	2.16b	2.70b

いずれも5%水準で有意

表5 評定対象による印象比較（日本人評定者）

対韓国人	開放的	礼儀正しい	内向的	あたたかい	積極的	好き
韓国人	2.72a	2.83a	2.35a	2.72	3.16a	2.77a
在日コリアン	2.14b	2.85a	2.68b	2.69	2.53b	2.64b
日本人（自民族）	1.94b	3.11b	3.16c	2.66	1.89c	2.91a

いずれも5%水準で有意

在日コリアン、日本人について「失礼—礼儀正しい」項目を評定した場合（表4）、韓国人に対する評定平均値3.01と、在日コリアンに対する評定平均値2.96は、ともにアルファベットaが添えられていることから、この2つの対象の平均値間には有意差が認められなかったが、日本人に対する評定平均値3.46については、韓国人と在日コリアンを対象とした評定平均値との間に有意差が認められた、ということの意味している。「つめたい—あたたかい」の場合では、3つの対象の評定平均値にそれぞれ異なるアルファベットa, b, cが添えられているが、これは3つの平均値のすべてについて、互いに有意差が認められていることを示している。また、項目名が四角く囲まれているものは、有意な被験者間効果が認められたことをあらわす。たとえば表4の「礼儀正しい」については、韓国人評定者と日本人評定者の評定に有意な差が認められたことをあらわしており、また韓国人評定者の評定について、韓国人（自民族）と在日コリアンについては有意差が認められず、韓国人（自民族）と日本人、在日コリアンと日本人については、有意差が認められたことを示す。

韓国人評定者は在日コリアンについて、「失礼な—礼儀正しい」「外向的な—内向的な」の2項目で、3民族集団中最も低い平均値5を与えている。その他については韓国人と日本人に挟まれた値をとっている。日本人評定者は「好き—嫌い」を除いては在日コリアンに韓国人と同じか、日本人と韓国人の間に位置する評定を与えている。今回、評定で用いられたイメージの範囲内においては、おおむね、在日コリアンは韓国人と日本人の中間的な位置づけとなっている。日本人評定者は、一般的なイメージ項目では中間的な評価をしているものの、「嫌い—好き」では在日コリアンに対して、相対的に低い評定を与えていることにも注目すべきであろう。ただし尺度の中間値は2.5であるから、「嫌いである」と評定しているわけではない。

ここで、在日コリアンが抱えている様々なイシューについての、在日コリアン、韓国人、

⁵ 「外向的な—内向的な」については逆転尺度として

表6 在日コリアン7つの 이슈（〔 〕内は項目略称）

1. [意義] 日本の学校は、日本人に対しても在日コリアンの存在意義をもっと教えるべきである
2. [報道] 在日コリアンが日本国内で運営するマスコミが必要である
3. [母語] 在日コリアンの子供たちは「祖国」の言葉であるハングルを勉強すべきである
4. [名前] 常に民族的な名前を名乗るべきである
5. [組織] 在日コリアンの意見を表明するために、もっと強い政治組織が必要である
6. [歴史] 民族の歴史を学ぶことは必要だ
7. [独自] 在日コリアンは日本社会に対する独自性を持つべきである

日本人の態度の違いによって、在日コリアンの「中間的立場」について検討してみよう。在日コリアンの抱える 이슈として、表6の7つの意見をとりあげ、賛成するものを選択してもらった。

なお、1995年調査のデータについては、それぞれについて「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の5件尺度で測定しているため、賛成側2件を「賛成」として再コーディングした。

民族集団ごとに賛成者のパーセンテージを示したのが図1である。在日コリアンに関するいくつかの 이슈について賛否を問うたところ、在日コリアンと韓国人は賛意のパターンとしてはよく似た傾向を示した。ただし「日本の学校は、日本人に対しても在日コリアンの存在意義をもっと教えるべきである」「在日コリアンの子供たちは、「祖国」の言葉であるハングルを勉強すべきである」「民族の歴史を学ぶことは必要だ」の3項目については韓国人の賛成者比率が在日コリアンの賛成者比率をやや上回っている。日本人は「在日コリアンが日本国内で運営するマスコミが必要である」「在日コリアンの子供たちは「祖国」の言葉であるハングルを勉強すべきである」「常に民族的な名前を名乗るべきである」「在日コリアンの意見を表明するために、もっと強い政治組織が必要である」「在日コリアンは日本社会に対する独自性を持つべきである」の5項目について、相対的にかなり低い賛成者比率となった。在日コリアンや韓国人とそれほど賛成者比率が異なる項目である「日本の学校は、

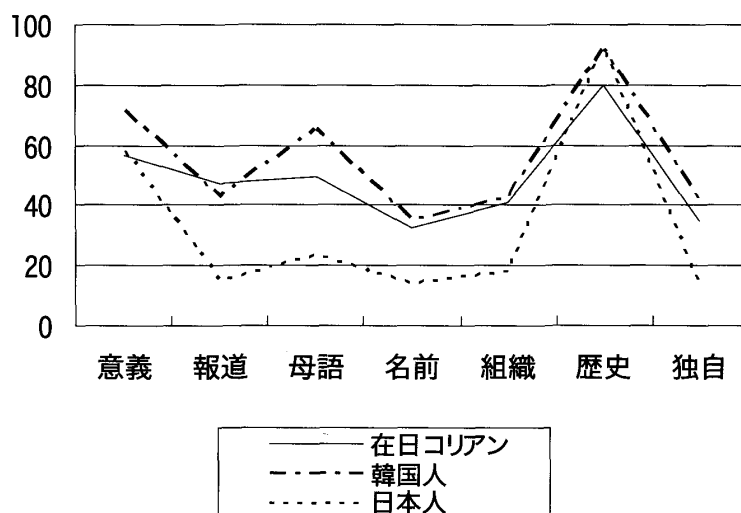


図1 在日コリアンに関する 이슈への賛成者比率 (%)

日本人に対しても在日コリアンの存在意義をもっと教えるべきである」「民族の歴史を学ぶことは必要だ」の2項目とこれら5項目を比べると、日本社会における異化的存在としての在日コリアンを直接的に帰結するような項目については反対する、ということが読み取れるだろう。このように見ると、具体的なイシューに対する態度としては、在日コリアンと韓国人は問題意識を共有しており、日本人の問題意識とは大きく異なっている。在日コリアンについての印象という点では、韓国人も日本人も同様に、在日コリアンを中間的存在と認識しているようであるが、具体的な問題意識の共有という点では、明らかに在日コリアンと韓国人のそれは共通しているといえるだろう。

次に、韓国人評定者と日本人評定者の好悪評定について、印象評定との関係を検討してみよう。韓国人評定者と日本人評定者のそれぞれについて、好悪評定を従属変数とし、印象評定を独立変数とする重回帰分析を、韓国人、在日コリアン、日本人を対象として行った(表7, 表8)⁶。

韓国人評定者の印象評定によって、各対象の好悪評定を説明するモデル(表7)については、どの対象についても決定係数の値が小さく、日本人に対する好悪を説明するモデルではモデルそのものが有意とならなかった。日本人評定者の印象評定によって、各対象の好悪評定を説明するモデル(表8)についてはモデルの当てはまりが韓国人評定者のモデルに比べ

表7 印象評定による好悪説明重回帰モデル(韓国人評定者)

	韓国人	在日コリアン	日本人
開放的	.335**	.177	.155
礼儀正しい	.095	.139	.075
内向的	.144	.137	-.171
あたたかい	.185	.347**	.207
積極的	.124	-.096	-.125
Adj. R ²	.160**	.125**	.039

*p<0.05, **p<0.01

表8 印象評定による好悪説明重回帰モデル(日本人評定者)

	韓国人	在日コリアン	日本人
開放的	.076	.006	.393**
礼儀正しい	.250**	.361**	.078
内向的	-.033	-.022	-.017
あたたかい	.406**	.291**	.247**
積極的	.179*	.137	-.031
Adj. R ²	.352**	.368**	.233**

*p<0.05, **p<0.01

⁶ 印象評定5項目と好悪評定1項目の合計6項目間の相関係数を付表として掲載

るとかなり良いことがわかる。

説明力が弱いながらも、韓国人評定者の自民族好悪評定には「閉鎖的—開放的」項目が、在日コリアンの好悪評定には「つめたい—あたたかい」が有意な影響力を持っている。日本人評定者は好悪評定の対象にかかわらず、一貫して「つめたい—あたたかい」が影響力を持っており、また対象が韓国人と在日コリアンの場合で、非常によく似た影響力のパターンを示している。

自民族の好悪評定について、韓国人評定者と日本人評定者の両方に、「閉鎖的—開放的」の影響が見られる。韓国人評定者も日本人評定者も、自らをどちらかという「閉鎖的」であると認識しており（表1、表2）、自らをより「開放的」であると感じている評定者ほど、自民族に好意的な好悪評定をする傾向が認められる。

考 察

これまでの分析結果をまとめると、次のようになるだろう。まず、在日コリアンが抱えている様々な 이슈 について、在日コリアンと韓国人は問題意識を共有しており、これに対して日本人のそれは大きく異なっていた。また、日本人は日本社会において在日コリアンが強く独自性を主張するような状況を帰結することが想像される 이슈 については反対、という態度を示していることがわかった。

次に自民族の印象および相互印象の比較と相違については、韓国人評定者と日本人評定者の両方とも、自民族の印象と他民族の成員である評定者が自分へ持っている印象の評定にかなり大きな差異が見て取れた。特に日本人評定者についてはそのずれが大きい。またこのずれは、必ずしも自分にとって有利に、あるいは肯定的に自らの印象を捉えたものではなく、「冷たい—あたたかい」を除くすべての項目で、他者からの評価よりも自身を低く評定していた。在日コリアンに対する印象評定については、韓国人評定者も日本人評定者も、比較的近似した印象を持っていることが示唆された。

在日コリアンに対する印象評定は、韓国人評定者も日本人評定者も、おおむね韓国人と日本人の中間的な位置づけを示していた。日本人評定者は印象評定では中間的な評価をしているものの、好悪評定では相対的に低い評定を与えていた。

印象評定による好悪評定の説明モデルについては、韓国人評定者の場合、どの対象についても説明力の高いモデルとは言い難い結果となった。つまり、ここで取り上げられた印象項目によって好悪を決定しているとは言えない、ということである。特に日本人を評定対象とするモデルでは、モデル自体が棄却された。これに対して日本人評定者の場合は、どの対象についても一定の説明力を持つことがわかった。なお、説明力はあまり高くはなかったが、韓国人評定者の自民族好悪評定には「閉鎖的—開放的」項目が、在日コリアンの好悪評定には「つめたい—あたたかい」が有意な影響力を持っていた。日本人評定者については一貫して「つめたい—あたたかい」の影響力が認められ、対象が韓国人と在日コリアンの場合で似たパターンとなった。

自民族の好悪評定について、韓国人評定者と日本人評定者の両方に、「閉鎖的—開放的」の影響が見られた。双方とも自らをやや「閉鎖的」であると感じており、また自民族が「開

放的」であると感じている評定者ほど、自民族に好意的な好悪評定をする傾向が認められた。

韓国人と日本人の大学生がお互いにどのような集団印象を形成しているかについて記述的分析を行うという第1の目的に照らしてこれらの分析結果を考察してみよう。両者に共通して言えることは、まず自民族の印象評定と、他民族成員による印象評定との間に大きな差が認められるということである。韓国人大学生の印象評定については、特に自民族評価が他民族成員からの評価よりも高くなっている項目として「あたたかい」と「積極的」が認められ、また逆に自民族評価が低くなっている項目は「礼儀正しい」であった。日本人大学生の印象評定については、自民族評価が他民族成員からの評価よりも高くなっているのは「礼儀正しい」のみで、「開放的」「外向的」「積極的」ではいずれも自民族評価が他者評価よりもかなり低い結果となっていた。つまり、両者ともにそれぞれの集団印象として評価が共通しているのは、5つの印象項目のうち、日本人よりも韓国人のほうが積極的であり、韓国人よりも日本人のほうが礼儀正しい、という2点のみであった。これは、両集団の「国民性」として、世俗的によく知られている特徴に一致しているといえるだろう。両者の間で評価が逆転しているのが「開放性」である。日本人評定者は、韓国人のほうが自分たちよりも開放的であると評定しており、韓国人評定者については、評定対象による評定値の平均値比較において有意な差異が認められなかったが、評定値の傾向としては、日本人のほうが自分たちよりも開放的であるとしている。また韓国人が自民族の好悪評定を規定する要因として有意であったのもやはり「開放性」であった。韓国人にとって「開放性」が意味するものが具体的にいかなるものなのか、ということについては今回用いたデータの範囲内で詳細な検討を加えることはできないが、同時に測定された「積極性」については比較的高い自民族評価になっていること（表4）、開放性と積極性の相関が高いこと（表9）、積極性と好悪の相関は有意でないこと（表9）と、重回帰分析の結果（表7）を考えあわせると、集団の自民族印象としての積極性が、開放性を伴って初めて好悪につながっていることを示していると考えられよう。このことは、韓国人の「国民性」である積極性と、それを抑制する社会情勢とに関連する問題であるかもしれないが、分析結果を超える推測は控えることとし、ここではこれ以上の考察は行わない。

日本人評定者もまた自らを「開放的でない」と評価しているが、韓国人評定者と同様に、日本人評定者についても「開放的」という自民族評価と好悪評定との有意な関係が示された。2つの民族的集団にとって「開放性」は共に解決されるべき自民族の問題点であり、開放性が高まることで自己の帰属する集団への好感が高まっていくということが言えるだろう。

さて、相互および自民族の印象評定は以上のようなものであったが、好悪評定と印象評定の関係について、韓国人評定者と日本人評定者の間に認められた差異は興味深い。日本人評定者の印象評定が好悪評定を規定しているのに対して、韓国人評定者の印象評定は、好悪評定の重要な規定因とはなっていなかった。日本人は、「あたたかさ」を好悪評定において非常に重視している。これは、「あたたかい」人物を好むという一般的傾向性（Kelley 1950）と一貫している。ただし、韓国人と在日コリアンを好悪の対象とする場合には「礼儀正しい」ことも強い影響を与えているが、日本人を対象とする自民族評価の場合には有意な影響力を持っていない。これは、日本人が全体として「礼儀正しい」ことはすでに「確定した事実」と主観的には認識されており、好悪に影響を与えていないためと考えられる。逆に、韓

国人や在日コリアンは日本人に比べて「礼儀正しさ」にかける部分があると評価されており（表5）、「礼儀正しさ」が好悪評定の影響因となっていると考えられるだろう。

では、韓国人評定者のよる好悪評定は、何に基づいて決定しているのだろうか。少なくとも、ここで取り上げられている5つの印象項目が決定因となっていないことは明らかである。そもそも、対人印象が好悪の決定因となっていないのか、あるいはここで取り上げられなかった印象項目が影響を与えているのだろうか。この点については今後の研究を必要とするところである。

さて、韓国人と日本人が在日コリアンについてどのような印象を形成しているかを明らかにするという第2の目的について考察を加えよう。上で述べたとおり、分析結果は2つのことを示している。まず、韓国人評定者と日本人評定者は、在日コリアンについて近似した印象を持っているということ、次に、その印象は韓国的でもあり日本的でもあるが、おおむね両者の中間的位置づけになっている、ということである。そして、その前提として重要なのは、今回の調査対象者（評定者）は、いずれも在日コリアンと直接的な接触がほとんどなく、その印象は間接的かつわずかな情報によってのみ形成されていると考えられることである。どのような情報源と情報に基づいて、在日コリアンの印象が形成されているのかについて、さらなる調査研究が必要であろう。

今回の調査研究では、調査対象者がきわめて限定的であること、調査項目の制約などの点から、分析の結果として確固たる知見として言えることは決して多くはないが、民族集団間の相互印象形成というテーマについて、今後の研究の基礎となるべきいくつかの知見を得ることができた。今後は、印象形成の規定因について、情報の質や量、流通経路などを特に重視した研究を進めていくことが有用であろう。

要 約

本研究は、第1に韓国人と日本人の大学生がお互いにどのような集団印象を形成しているかについて記述的分析を行うことを、第2に韓国人と日本人が在日コリアンについてどのような印象を形成しているかを明らかにすることを目的とする。

韓国人評定者と日本人評定者の印象評定について、自民族の印象評定と、他民族成員による印象評定との間に大きな差異が認められた。またそれぞれの集団印象として互いの評定が共通しているのは、日本人よりも韓国人のほうが積極的であり、韓国人よりも日本人のほうが礼儀正しい、という2点のみであり、両集団の「国民性」として、世俗的によく知られている特徴に一致しているといえる。好悪評定と印象評定の関係については、日本人評定者の印象評定が好悪評定を規定しているのに対して、韓国人評定者の印象評定は、好悪評定の重要な規定因とはなっていなかった。

韓国人評定者と日本人評定者は、在日コリアンについて近似した印象を持っているということ、次に、その印象は韓国的でもあり日本的でもあるが、おおむね両者の中間的位置づけになっている、ということが明らかになった。

付 表

表9 韓国人評定者の韓国人評定間相関

	開放性	礼儀正しい	内向的	あたたかい	積極的
礼儀正しい	.107				
内向的	-.354**	.210			
あたたかい	.144	.287**	-.073		
積極的	.308**	.081	-.415**	.179	
好き	.335**	.207	.007	.236	.206

*p<0.05, **p<0.01

表10 韓国人評定者の在日コリアン評定間相関

	開放性	礼儀正しい	内向的	あたたかい	積極的
礼儀正しい	.081				
内向的	-.239*	.173			
あたたかい	-.043	.135	.084		
積極的	.297**	.005	-.309**	.232*	
好き	.099	.213	.158	.340**	-.010

*p<0.05, **p<0.01

表11 韓国人評定者の日本人評定間相関

	開放性	礼儀正しい	内向的	あたたかい	積極的
礼儀正しい	.002				
内向的	-.153	.149			
あたたかい	.125	.028	.004		
積極的	.272*	-.089	-.307**	.088	
好き	.163	.067	-.139	.197	.013

*p<0.05, **p<0.01

表12 日本人評定者の韓国人評定間相関

	開放性	礼儀正しい	内向的	あたたかい	積極的
礼儀正しい	.063				
内向的	-.354**	.043			
あたたかい	.325**	.302**	-.181*		
積極的	.233**	.014	-.325**	.097*	
好き	.276**	.378**	-.181*	.527**	.243**

*p<0.05, **p<0.01

表13 日本人評定者の在日コリアン評定間相関

	開放性	礼儀正しい	内向的	あたたかい	積極的
礼儀正しい	.046				
内向的	-.477**	.005			
あたたかい	.222*	.570**	-.180*		
積極的	.510**	-.084	-.427**	.191*	
好き	.168	.517**	-.136	.528**	.173

*p<0.05, **p<0.01

表14 日本人評定者の日本人評定間相関

	開放性	礼儀正しい	内向的	あたたかい	積極的
礼儀正しい	.223*				
内向的	-.118	.272**			
あたたかい	.147	.252**	.038		
積極的	.250**	.065	-.170	.230*	
好き	.442**	.221*	-.032	.317**	.133

*p<0.05, **p<0.01

文 献

- 福岡安則 1993 在日韓国・朝鮮人 (中公新書1164) 中央公論社
- Hamilton, D. L., Katz, L. B. & Leirer, V. O. 1980 Cognitive Representation of Personality Impressions: Organizational Processes in First Impression Formation *Journal of Personality and Social Psychology* 39 pp.1059-1063
- Kelly, H.H. 1950 The Warm-Cold Variables in First Impressions of Persons *Journal of Personality* 18 pp.431-439
- 金明秀・稲月 正・中原 洪二郎・潮村 公弘・豊島 慎一郎 1997 在日韓国人の社会成層と社会意

識全国調査報告書 在日韓国青年商工人連合会

- 京都大学教育学部比較教育学研究室 1990 在日韓国・朝鮮人の民族教育意識 明石書店
- 中原 洪二郎・潮村 公弘・中村 真・渡邊 晶子 2002 エスニック・マイノリティの相互イメージ形成に関する研究 ―在日コリアン・華人華僑に対するフォーカス・グループ・インタビューから― 日本社会心理学会第43回大会（東京）
- 中原 洪二郎・潮村 公弘・中村 真 2003a 韓国人と日本人の相互民族イメージ形成と在日コリアン―日韓大学生の調査から― 日本社会心理学会第44回大会（東京）
- 中原 洪二郎 2003b 参政権と帰化をめぐる在日韓国人の意向 その類型化と構造の分析 社会心理学研究19(2) 日本社会心理学会
- Robbart, M., Fulero, S., Jensen, C., Howard, J. & Birrell, B. 1978 From Individual to Group Impressions: Availability Heuristics in Stereotype Formation *Journal of Experimental Social Psychology* 14 pp.237-255
- 潮村 公弘 2003 民族・言語・社会意識についての韓日比較調査報告書（第一報） ―民族的ステレオタイプに関する同一言語を用いた異文化比較― 信大日本語教育研究 第3号 pp.2-11 信大日本語教育研究会
- Tversky, A. & Karneman, D. 1974 Judgment under Uncertainty: Heuristics and Biases *Science* 185 pp. 1124-1131

[謝辞]

本調査研究の実施にあたっては、信州大学との国際学術交流協定締結大学である大韓民国・カトリック大学校の姜錫祐先生、李範錫先生、市岡香代先生、中野敦先生、金俊希さんより多大なご尽力をいただいたことに厚く御礼申し上げます。また、信州大学人文学部の諸先生方にも様々なご協力をいただいた。とりわけ、第三回韓国言語文化研修の代表者・団長であり、執筆者の一人潮村とともに学生の引率にあられた沖 裕子先生のお力添えとご配慮のおかげであるところ大である。記して改めて感謝致したい。